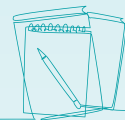


エッセイコンテストにみる “コロナと日常”



今年の特別テーマは「思いやりは心のワクチン」。長引くコロナ禍で人の関わり方や距離感などが、大きく変化しましたが、誰かの気遣いや優しさが今一番社会に必要であるとの思いを込め、このテーマを設けました。

昨年の応募作品では、「未知の脅威」に対する恐怖や、先行きの見えない不安などを抱く作品が目立ちました。しかし、今年の作品には、自分自身がコロナに罹患した、あるいは濃厚接触者になった、身近に同様の人がいたことが、「特別なこと」でなく、当たり前のこと」として書かれているのが印象的でした。

また、他人と触れ合う機会が減少したこと、コロナ禍以前と比べ、家族など身近な人との「ふつうの日常生活」に着眼したエピソードや、身近な人々との関係や自分自身を深く見つめ直した作品が目立ちました。

一方、昨年度とは異なり、街中での出来事を綴る作品も増えました。感染症の存在が当たり前になりつつあり、外出機会も徐々に増えていくことでしょう。

入賞作品の中から珠玉の一遍をご紹介しますので、人とのふれあいの素晴らしさ、大切さを改めて感じていただければと思います。

入賞作品紹介

あの日の双子ベビーカー

東京都 上谷紗恵子 (36歳)

【受賞に寄せて】

双子育児に疲れていた時に、中学生に優しくしてもらいにしました。私の中の大切なエピソードが、この度の入賞でより一層輝くものになりました。もらった優しさを私も広げていきたいと思います。

平成最後の夏に、双子を出産した私。それからは怒涛の日々だった。「一歳まで頑張れば楽になるよ」、周りにそう言われがむしゃらに一年頑張ったけれど、ちっとも楽になんてならなかった。とはいえ、腰が据わり、つかまり立ちもでき、夜泣きも減り、楽になった部分もある。でも、食事は一日3回幼児食を作って食べさせるより、母乳とミルクだけのほうが楽だし、歩けるようになると行動範囲が広がって大変だった。

その日も、理由もわからずに泣く双子をベビーカーに乗せ、とりあえず家を出たが、靴下を脱いでポイする双子に気を取られ、溝にベビーカーのタイヤを脱輪させてしまった。

双子は無事だったが、双子ベビーカーは重くて引き上げに奮闘していると、サッと中学生が走ってきた。脱輪したのは、中学校の校庭脇だったのだ。彼は友人を呼び、あっという間に溝からタイヤを出してくれた。

「本当にありがとう。授業中？」

「部活中だから、先生に言って来た」

「こいつも双子なんすよ」

「自分は双子で良かったけど、親は大変だったんすね。双子、おもしろいよ」

そう言って、彼らは戻っていった。彼らとのわずかな会話の間に、双子は泣き止んでいた。すぐに駆けつけてくれた彼らの思いやりが、心にしみた。そうか！双子、おもしろいか。いっちょ、頑張ってみるか。

この夏4歳になった双子は、とても仲良しだ。双子で良かった、そう思ってもらえるように、これからもママ頑張るよ。

あの日の少年たち、本当にありがとう。

(読売新聞社賞)

第38回

「小さな親切」はがきキャンペーン

後援：日本郵便株式会社・読売新聞社

協賛：株式会社河出書房新社

応募総数：1,730編

※入賞・入選者はWEBサイトで発表しています。また、入賞・入選作品は、来年2月中旬発行の「令和4年度作品集」に掲載します。

